

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第89号

平成31年6月11日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

現地学習で楠正成・正行親子の生地を訪ねる

建水分神社正式参拝と扁額閲覧・千早赤阪散策

扁額（木額）裏書の正行最古の直筆文字に感動

● 下赤坂城址への道通行止、思わぬ“散策” ●

今月は、現地学習「建水分神社正式参拝と千早赤阪散策」で、集合地の総合センター・駐車場に三々五々集まり、都合11人が3台の車に分乗して出発した。

道中順調に進み、午前10時30分過ぎに武未来刈神社に到着、岡山禰宜の出迎えを受け、この日の一日がスタートした。

正式参拝と扁額裏書鑑賞終了後、「扇谷さん、この後どこに行かれるのですか？」と岡山禰宜に問われ、「楠公誕生地、郷土資料館を訪ねた後、下赤坂城址、寄せ手塚・身方塚に向かう予定です。」とお答えすると、「下赤坂城址への道路は通行止めになっていますので、消防署まで行かれて、横の公園に駐車して、徒歩で向かわれるとよいです。」とアドバイスを受けた。

以前から、下赤坂城址には何度も訪ねているが、千早赤阪中学校の敷地の中を歩いていくことに、いささか驚きと疑問・危険を感じていたので、今の時代、子どもたちの安全確保の観点から一般車両の構内通行を規制されたのであろうと、勝手に合点し、納得した。

お蔭で、消防署から下赤坂城址まで、約1キロメートルの路を散策することとなったが、千早の村並みや金剛山の麓を一望しながら千早赤阪の広がる棚田風景を楽しみ、歩くことができた。高齢者？の多い会ではあるが、90歳を超えた人も、ほぼ平らな村道を踏みしめながらの散策となり、落伍者も出ることなく目的地にたどり着き、下赤坂城址の碑の位置からは、ほぼ千早赤阪村360度の遠望を堪能し、それぞれ満足の様子。途中小雨にあったが、暑くもなく、たのしい現地学習となった。

● 建水分神社で正行直筆・扁額裏書に直面 ●

さて、この日、建水分神社では、岡山博美禰宜の講話を



お聞きした後、本殿でそろって正式参拝した。

そして、普段非公開の本殿に上がり、岡山禰宜から、中殿に一間社春日造、左右両殿に二間社流造を配し、渡り廊下で連結するという全国でも他に例をみない様式について説明を受けたが、森林に囲まれ、湿気も多いとみられ、屋根などの痛みが相当進んでいるように思えた。20～30年に一回の屋根の吹き替えが大きな課題とのこと。



その後、社務所に入り、念願の木額扁額の裏書を一人一人拝見した。

岡山禰宜は、見やすいようにと社務所入口に扁額を移し、照明を当てて下さるといふ配慮に、一同大感激。680年前の木額という事で、摩耗が激しく、一部虫食いも進んでいる。しかし、漆文字で書かれた正行の直筆は、照明を当てることで、何とか判読可能で、その老成した達筆ぶりは想像通りであった。

これが正行最古の直筆文字かと思いつつ、あたかも楠正行本人に合ったかのごとき錯覚に陥った。何度見ても、身震いがする。

そして、楠正成を祀る撰社の南木神社の立派なこと。現在の社殿は、昭和9年の室戸台風の被害に遭い崩壊したため、昭和15年に竣工したもので、撰社としては破格の官幣社建築に準じて設計・再造営されたもので、訪れる参詣者が本殿と間違ってしまう事も多いとのことだった。

● 楠公誕生地・村立郷土資料館見学 ●

建水分神社を後にして、昼食後、楠公誕生地に移動した。

千早赤阪村のほぼ中心に位置するこの地には、郷土資料館の外に、同村の教育委員会、大阪最古・最小の「道の駅」等がある。

ここでは、楠氏ゆかりの展示や戦前使われた教科書に載る楠正成や正行を堪能した。

主な展示物は、太平記に記されている楠正成が活躍した千早城・楠木城（上赤坂城）、赤坂城（下赤坂城）などのそれぞれ山城跡の発掘調査時の写真パネルや出土遺物、千早城址の模型などがある。

ひとつ残念だったのは、楠妣庵観音寺所蔵の巻物・大楠公一丈絵巻（「太平記絵詞 楠木合戦の部」）がショーケースの中に展示されていたが、照明が当たるためか長年の劣化で色がほとんど抜けてしまっていたことである。

● 下赤坂城址・棚田と寄手塚・身方塚 ●

下赤坂城址は、過去何度も訪れているが、今までは車で千早赤阪中学校の敷地内を通過して下赤坂城址に着いていたが、冒頭に書いたように、今はこの道は通行止めとなっている。

この城は籠城するには、あまりにも平城に近い地勢にあることがすぐわかり、正成が笠置に赴き、とんぼ返りで帰ってきて準備不足で兵をあげたことも重なり、赤坂挙兵は1カ月もたずに投げ出すことになった。

眼下に広がる棚田は、日本棚田100選にも選ばれ、素晴らしい光景が広がる。

かつて、この地に正成そして正行も、立ったかと思うと万感迫るものがある。一行は下赤坂城址を後に、森屋惣墓の寄せ手塚・身方塚に向かった。



日本のどこにもある地域の墓の、しかも、多くの墓石と同じように立つ2基の墓は、特に説明がなければ分からない状態で立っている。

敵も味方も死ねば同じという思いに加え、楠氏が民と共に生き、戦った証が、この在り様にも見て取れるのではないか。ことさら区画を分けるとか、村人の墓と区別するような思いは微塵も見せない。

我々も、千早赤坂の戦いで亡くなった楠軍の兵士はもちろん、押し寄せ亡くなった幕府軍の兵士の墓にもお参りし、手を合わせた。

今まで何度も訪れており、寄せ手塚が総高さ182センチの大型の石像五輪塔であることは分かっていたが、五輪塔の下に石組みの井戸のような穴が開いていることには気づかなかった。数メートルはあろうかと思われる石組の穴の上に寄せ手塚が建っているが、千早赤坂村発行「千早赤坂村の文化遺産」冊子の説明では、「用途は不明」とのことである。五輪塔の下に、まるで井戸のような深い石組の穴、これはいったい何を意味するのだろうか。

なお、寄せ手塚・味方塚の名称の由来であるが、同じく「千早赤坂村の文化遺産」冊子は、以下の通り記している。一（名前の由来の）歴史を繙いてみると河内名所図会に行きつく。同書によると、これらの塔は、南北朝動乱期、千早赤坂を舞台に起きた戦いにより、命を落とした堀の令を弔うために、楠正成によって造立された供養塔であり、その際、幕府軍を敵と呼ばず寄せ手とし、その五輪塔を味方の楠軍の塔より大きく建てたという、何とも奥ゆかしい、楠公さんの人情味が感じられる伝承から、その名で呼ばれるようになった。

（写真：表面上から、普段非公開の本殿前で岡山博美禰宜の説明を聞く会員／木額扁額の裏書：裏面左から、大楠公一丈絵巻の一部／森屋惣墓身方塚／森屋惣墓寄せ手塚・五輪塔の下には石組の大穴が数メートル掘り込まれている）

（文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭）

